糸車

編集 山形村ふるさと伝承館

名篭（なろう）遺跡の発掘

下大池八幡神社の裏、なろう原では、平成十六年秋から遺跡の発掘調査が行われています。古いところで約八千年ものはるか昔、以後断続的に人間が暮らしていたことを示す遺構や遺物が見つかっています。想像も難しいはるか昔の御先祖様、今の山形村の礎を作ってきた人間は、どんな生活ぶりだったのでしょうか。その一端を窺い知る事ができた発掘調査の成果を御紹介します。

（写真は上空から見たなろう原）

下大池区八幡神社裏で進められている「なろう原墓地公園」の工事に先立ち、削られてしまう遺跡の記録を詳細に残すため、平成十六年秋から発掘調査が行われています。その成果を時代ごと見ていきます。

初めて人間がやってきた時
縄文時代早期―八千年前

縄文時代になると土器が発明され、煮炊きが可能になったことで、可食食材が大幅に広がりました。これはそれまでの食料を求めて移動していた生活から、一ヵ所に留まって定住する生活への変化をもたらし、人口増加にもつながったと考えられています。人々は定住するようになると、竪穴式住居と呼ばれる家を建て集落を形成します。今まで山形村では、この時期の土器が数点採集されていただけで、様子はほとんど分かりませんでした。今回の発掘調査で、この時期の押型文土器等が穴の中から見つかりました。今のところ住居は見つかっておらず、穴のみ数基見つかっているだけですが、山形村最古の遺構（穴）になります。山形村周辺で暮らしていた人々も次第に定住するようになり、この地を選んだと考えられます。

▲ 押型文土器片（縄文時代早期）

▲ 集石遺構（縄文時代前期末～中期初頭）

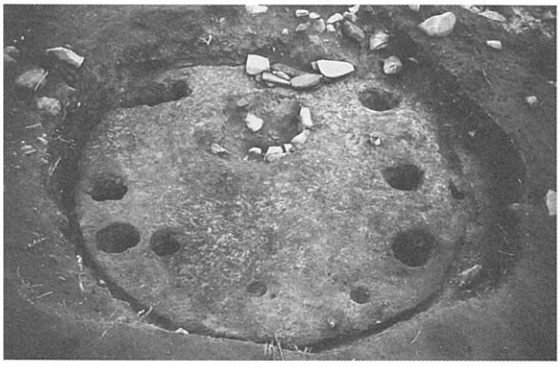
広範囲にわたって集落を形成
縄文前期末～中期初頭―五千年前

今回の発掘調査で最も多く見つかっているのがこの時期で、広範な範囲に遺構が分布しています。竪穴式住居が六軒、採ってきた木の実等を保存しておく貯蔵穴が数十基、集石遺構（石を熱して蒸し焼きした調理施設と言われる）が十数基ありました。これらの遺構は細長い尾根状地形の上に広がっていますが、竪穴式住居は谷に面した斜面に作っています。比較的平らな箇所ではなく斜面に建てる例は、塩尻市女夫山ノ神遺跡、松本市カニホリ西・カニホリ東遺跡などでも見られ、住み難いところになぜ作るのか、考古学者でも分からないナゾです。

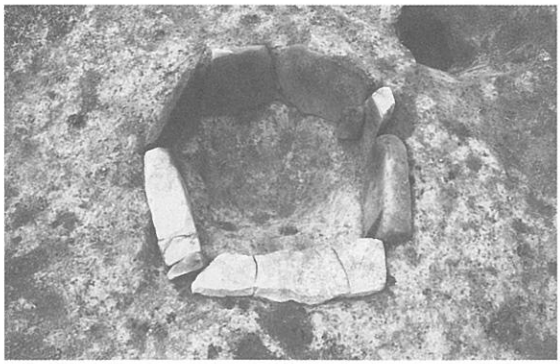
▲ 縄文時代中期初頭の土器

住居だけが見つかった
縄文中期後葉―四千二百年前

四軒の竪穴式住居が一ヵ所から固まって見つかりました。しかしそれぞれに新旧の時期差が認められ、四軒が同時に建っていたのではなく、一時期にすれば一軒（ないしは二軒）しか建っていなかったと考えられます。しかも見つかったのは竪穴式住居だけで、それ以外の穴を見つけることはできませんでした。また、こ



▲ 竪穴式住居（縄文時代中期後葉）



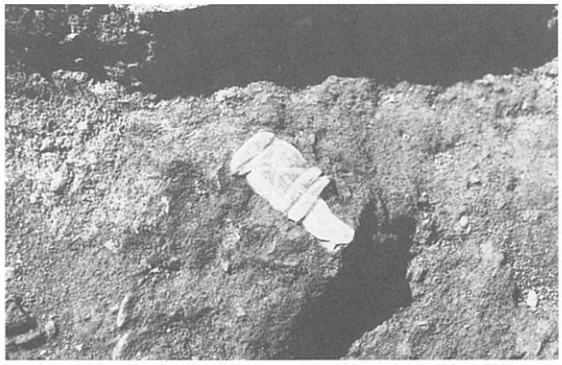
▲　竪穴式住居炉（縄文時代中期後葉）

の時期の竪穴式住居の入口によく見られる埋甕が一軒も発見されなかったこと、祭祀遺物である土偶が一点も見つからなかったことも示唆的です。村内で今までに調査された同時期の、殿村遺跡（上竹田）、三夜塚遺跡（下竹田）、淀の内遺跡（上大池）等の集落とは、性格が異なるのではないかと思われます。

祭祀の場として利用されたか？
縄文晩期―約三千～二千四百前

この時期の遺物・遺構が発見されたのは山形村初のことで、全く予測もできなかったものです。特に穴の中に石をならべた例は配石墓と考えられ、松本平でもあまり聞いたことが無い発見です。この時期の歴史像を描くのに貴重といえます。なおこの期の遺構・遺物は、この配石墓の周囲、半径十m程の範囲にしかありません。また繰り返し、数百年に渡って穴が掘られた様子で、数百個もの穴が重なり合うように見つかっています。しかし竪穴式住居は一つも見つからなかったので、生活の場というよりも、何らかのお祭りを長きに渡って行った、祭祀空間といった性格を有すと思われます。

▲　配石墓（縄文時代晩期）



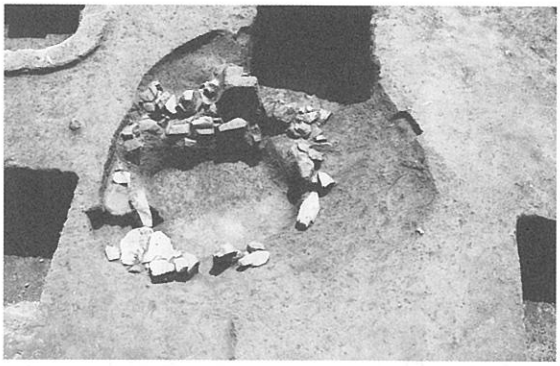
▲　石棒（縄文時代晩期）

▲　鎌倉時代の建物址

謎多き溝が掘られた
鎌倉時代―七、八百年前

尾根の一番高いところに掘られた溝が東西約百五十m以上にわたって発見され、溝の中から鎌倉時代の陶磁器片（白磁片、青磁片、東海系陶器片、珠洲焼甕片）や鉄製品が出土しました。最も残存状況の良い箇所で幅三m、深さ七、八十cmとしっかりした構造で、山側部分はどこまで続くのか判明しませんが、溝の底には砂利が堆積していたので、水を流していたらしい状況が伺えます。またこの時期の掘立柱建物三軒、建物らしき竪穴状遺構二軒、水を貯めた

▲　鎌倉時代の溝

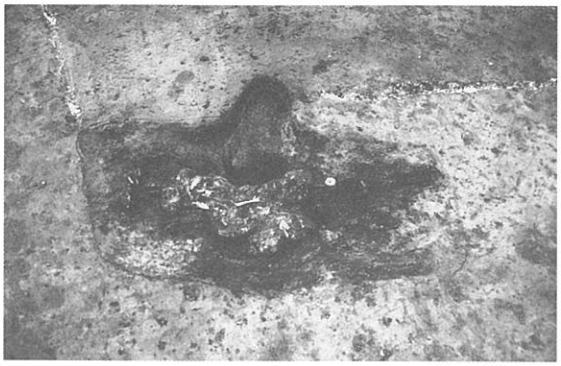


▲　水を貯めた様な石組遺構（鎌倉時代）

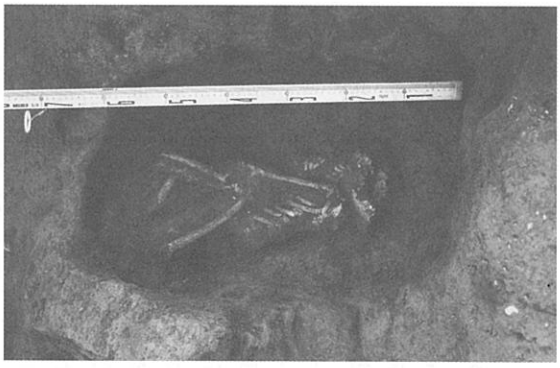
様な石組遺構一基、穴五十基程が見つかっています。時期は確定できませんが、畑の畝らしき凹凸状遺構も近い場所から見つかったので、この地の有力な農民が居を構え、畑作をしていたのかも?と想像しています。ただし、畑のためにこれだけの大規模工事をしたのかというと疑問が多く、何のために掘られた溝なのか判断に苦しむところです。

墓地として土地利用
室町～戦国時代―五、六百年前

土葬したお墓、穴を掘り遺体を火葬しそのまま埋めた墓（火葬墓）が見つかっています。これらからは銅銭が見つかる例があり、三途の川の渡し賃（六文銭）といった思想が反映していると考えられます。骨が残存していたお墓では、両手に三枚づつ握らせた状況が推測できるものもありました。お墓は全部で二十基程を数えますが、人骨が見つかった穴と銅銭が見つかった穴を数えているので、実数はもっと多いと思われ、墓地として土地利用されていた状況が伺えました。時期が確実に判明する副葬品を伴っていないのでいつとは言い難いのですが、銅銭（六文銭）に、明銭である「永樂通寶」（初鋳年一四〇八年）や、朝鮮銭である「朝鮮通寶」（初鋳年　一四二五年）があったので、室町～戦国時代と判断しました。なおこの時期の住居や建物は見つかっていないので、居住域は離れた場所にあると考えられます。



▲　火葬された墓（室町～戦国時代）



▲　土葬された墓（室町～戦国時代）

なお、この次の時期である江戸時代の遺構は何も発見されませんでした。徐々に山林化していったと考えられます。そして第二次世界大戦の頃に開墾され、爾来約六十年間、畑として利用されてきました。そしてこの度墓地公園として開発されます。約八千年間に渡る「なろう原」の土地利用と歴史が判明したと言えます。

ふるさと伝承館事業報告

今年度の歴史講演会は、「名篭遺跡発掘調査成果報告会」と題し、平成十八年二月二五日に行われました。当日は約六十名の方が会場に訪れ、熱心に聴講して頂きました。

お　知　ら　せ

現在は冬期休館となっていますが、四月より定期開館を始めます。大勢の皆様の来館をお待ちしています。

開館日及び時間
毎週土曜日　午後一時～五時
（但し入館は三十分前迄）

入館料
大人　一一〇円
中学生以下　無料

▲　歴史講演会の様子